報告番号　甲　第　　号

髙橋諒君　博士学位請求論文　審査報告

論文題目　『うつほ物語』の本文と生成

論文審査担当者

主査　慶應義塾大学教授（文学部）文学研究科委員　　小川　剛生

副査　慶應義塾大学非常勤講師（文学部）　　田坂　憲二

副査　法政大学教授（文学部）　　加藤　昌嘉

本学位請求論文は、平安時代中期に成立した作り物語である『うつほ物語』に対して、本文および成立の問題を考察したものである。前者は、文献批判によって、現在見る本文がどのように形成されたかを考え、推定される源流を明らかにする。後者は、これまで未解決のままであった、物語の構想や登場人物に関するいくつかの重要な疑問点に迫ろうとしたものである。

本論文は以下のように構成されている。

序・凡例
第一部　本文の形成
　第一章　　諸本論再考―前田本系統の位置づけをめぐって―
　第二章　　歌集としての『風葉和歌集』とその『うつほ物語』本文
　第三章　　浜田本と前田本系統の交渉―静嘉堂文庫蔵紀氏本の本文―
　第四章　　木曽本系統の特質
　　第一節　　『かやくき物語』の生成―木曽本系統の伝流―
　　第二節　　『こまのの物語』の生成―享受の一様相―
第二部　生成と享受
　第一章　　仲忠の主人公性は何か
　第二章　　内侍のかみ／初秋巻をどう読むか
　第三章　　国譲巻における一の上と、摂関の不在―作り物語の歴史認識―
　第四章　　物語の人物設定

第一節　　楼の上巻の変容―涼の子を中心に―
第二節　　『源氏物語』東屋巻と浮舟巻のはざま―右近は二人か―
結

論文要旨

髙橋君は、卒業論文・修士論文より一貫して、『うつほ物語』を中心とする平安時代の作り物語の本文研究と成立論に取り組んでおり、近年、研究成果を精力的に学術雑誌に発表している。この学位請求論文は、既発表の論文 5 本に新稿を加え、二部八章に構成した研究編、さらに『うつほ物語』の主要本文を対照した校本を資料編として副えるもので、400 字詰め原稿用紙に換算して優に 3000 枚を越える、浩翰な内容となっている。

『うつほ物語』は、『源氏物語』に数十年先駆けて成立し、かつ源氏の約三分の二の分量を誇る、最古の長編物語とされる。現存諸本は大きく四つの系統（前田本・浜田本・木曽本・流布本）に分かたれ、相当の数があるが、どの系統にも古写本がなく、写本同士の先後関係もはっきりせず、よるべき本文が確定しない。文学史上の意義に比して、基礎的研究が停滞していたと言わざるを得ない。髙橋君の研究は、この状況に風穴を開けようとするものである。

第一部では、通説となってきた諸本の系統分類をいったん白紙に戻して検証し、本文が派生していく過程を明らかにする。また、個々の伝本とその本文の性格に焦点をあて、物語写本がどのように製作され、享受されるかといった視点から考察を深めようとする。

第一章「諸本論再考―前田本系統の位置づけをめぐって―」 は、諸本のうち最も重視される前田本系統の本文を遡源するものである。この系統は前田家十三行本（尊経閣文庫蔵）によって代表されるが、該本の箱書の記述を起点に、さまざまな資史料を博捜し、室町時代後期の禁裏の文庫に蔵されていた「うつほ物語」の存在、その重要性を指摘する。そしてこの本こそが、これまで想定されていた四系統の共通祖本であると比定する。従来、対校本の選定は注釈書によって異なっていたが、具体的な共通祖本を想定し得たことで、本文の復原という観点から、前田本系に限らず、四系統の本文を等しく検討する必要性が生じたことを指摘する。

第二章は「歌集としての『風葉和歌集』とその『うつほ物語』本文」である。鎌倉中期成立の風葉集は、勅撰和歌集の体裁に倣いつつも、物語和歌だけを集めた珍しい撰集であり、しばしば散逸した物語の復原に活用されてきた。『うつほ物語』の和歌も、物語を踏まえた詞書とともに、110 首も採られている。鎌倉時代の写本が現存しない『うつほ物語』にとって、『風葉集』は当時の姿を窺う貴重な手がかりである。とはいえ、『風葉集』撰者は、撰集としての部立、また和歌の配列を重視し、物語の本文を、歌集の体裁に合わせて改変したとおぼしき例が散見される。したがって、現

在の『うつほ物語』本文の異同を、『風葉集』の本文に単純に結びつけることはできない、と説く。

第三章「浜田本と前田本系統の交渉―静嘉堂文庫蔵紀氏本の本文」は、江戸初期に派生した浜田本系統を俎上に載せる。そのうち最も古態をとどめるという静嘉堂文庫蔵紀氏本の本文の性格を明らかにしている。該本は前田本系とされる、ある一本によって脱文が補入され、異文が注記されている。この対校された本文の性格を探ると、実は既に前田本系と浜田本系の本文とが取り合わされたテキストであることが判明する。すなわち紀氏本は、前田本系と浜田本系諸本が流布する過程で、二重に交渉して生まれた混態本であり、古態をとどめてはおらず、新たな異本と見なすことができるとする。

第四章は二節からなり、木曽本を対象とする。まず第一節「『かやくき物語』の生成―木曽本系統の伝流」では、楼の上の上下巻を独立させ、別の物語に仕立てた『かやくき物語』が、実は『うつほ物語』木曽本系統によっていることを明らかにする。木曽本系統は江戸期に整定された本文と思しく、朱引によって本文に抹消が施されているのが特色であるが、『かやくき物語』の本文は、ちょうどこの朱引箇所を除去した形となっている。また振り漢字および振り仮名、異文などの注記があるが、これも木曽本系統諸本に存する注記は墨書に、独自の注記は朱書とされて区別される、という点を指摘し、傍証としている。

第二節「『こまのの物語』の生成―享受の一様相―」も同じく、『こまのの物語』と題される写本が、実は木曽本系伝本の、吹上の上巻をもとに別物語に仕立られたことを述べる。編者・書写者・読者は、『こまのの物語』が『うつほ物語』であると理解しつつ、別の物語として生成・享受したのである。

このように、稀覯にして大部な『うつほ物語』の一巻が、別の名を付されて流布することは、近世における特徴的な享受であった。とりわけ木曽本系統の諸本は、巻序はなく、外題には巻名しか記載されず、かつそれぞれの巻の内容の独立性が高いため、そのような所為がなされやすかった、と推断する。

ついで第二部は、この物語の重要なプロットや人物造型の齟齬矛盾を対象とする。こうした事柄は、長大な物語ゆえに生ずるものであり、現行の注釈書でもしばしば不審とされるが、ここでは、物語成立時にはそれらがいかに構想され、かつ享受されたのか、という視点から推測し、合理的に説明しようと試みている。

第一章「仲忠の主人公性は何か」では、『うつほ物語』の主人公が、なぜ仲忠とされているのか、という根本的な問題に迫る。すなわち、仲忠には読み手とだけ共有している情報があるのに、他の作中人物にはそれがない。平安時代の作り物語では、主人公は、読み手と共に秘事を保つ存在として位置付けられている。ならば、「あて宮求婚譚」は、『うつほ物語』では枝葉の挿話の一つに過ぎなくなる。この物語には、仲忠・あて宮、それぞれを主人公とする二つの系統の物語が混融していることが従来

疑問とされてきたが、一貫して機密を保持するという主人公のあり方から、琴の伝承によって栄華を極めんとする点にこそ、物語の根幹的な構想があることに言及する。

第二章「内侍のかみ／初秋巻をどう読むか」では、内侍のかみ巻は、現存本の順番とは異なり、国譲下の巻の後に読まれるべく成立した可能性を述べる。こうして位置づけることで、藤原の君巻から始発するあて宮求婚譚の終結（あて宮・沖つ白波）および立太子争い（国譲）という、「あて宮系」の巻々が、一つの系譜のもとに理解される。さらに、内侍のかみと、楼の上の上下巻が続けば、弾琴によって一族の栄華が極められんとする「俊蔭系」巻々をも把握できるようになる、との新しい見解を提示する。

第三章「国譲巻における一の上と、摂関の不在―作り物語の歴史認識―」では、国譲の上中下三巻において、藤原氏の大臣が「一の上」である旨が強調され、摂関が置かれていない点を指摘する。それは、源・藤いずれの側の皇子が立太子するか予断を許さない、緊張した状況を演出するためとする。また、立坊の後、藤原氏方が「一の人」となり、源氏方が関白職にあるとおぼしい記述は、従来指摘される、政治体制の協調ではなく、立坊が決定されてもなお、両氏の権力が拮抗している状況を描いていると推察する。

第四章は、物語の登場人物のありかたを考えた二節からなる。第一節「楼の上巻の変容―涼の子を中心に」は、涼の子が蔵開巻・国譲巻では男子であるのに、楼の上の巻では女子となるのは、性が換えられたと考える従来説に異を唱える。男から女へと設定が改められる必然性はなく、むしろ涼には子が二人いて、男に加えて女が生まれたという設定を追加したとする場合、蔵開上巻から楼の上下巻まで、あらゆる面で仲忠と対照的な涼の姿が描出される。一方それは、仲忠の理想的なあり方をも浮き彫りにする効果をもたらす、とする。第二節「『源氏物語』東屋巻と浮舟巻のはざま―右近は二人か―」も、『源氏物語』の登場人物に関する叙述の矛盾を取り上げる。宇治十帖に現れる右近という女房は、八宮の家に仕え、しばしばストーリーの展開を担う重要人物であるが、東屋巻と浮舟巻では設定が一致せず、同名異人説が唱えられていた。しかし物語は、一巻ごとに製作され書写されるとすれば、既に流布した巻は書き直せず、設定の変更や補足は、後の巻で処理するしか術がない。作り手は、浮舟巻では、右近を浮舟に仕える乳母の娘と変更し、それまでと矛盾が生じたとする。そして当然、この間に作者の構想には、断層を生じさせるような変化があったことになる。

審査要旨

戦後の『うつほ物語』研究は、諸本研究・本文批判を、成立の問題と弁別せず論じており、そこに陥穽があったと言える。諸本を博捜し、文献学的方法によって、成立当初の姿を示す原本に遡り、その上で成立を含めて作品を論ずることができるのは、ごく限られた作品に過ぎない。ことに、原作者の存在がほとんど意識されず、作品の

同一性が担保されない物語の場合はまず不可能であり、別の手法を取らなければならないことに早く気づくべきであった。本論文は、こうした研究史上における問題点を明確に捉えた上で構築されている。この点にまず、本論文における研究上の意義が認められる。

ただし、それはこの論文があるべき本文の復原に消極的であることを意味しない。従来、『うつほ物語』の現存諸本は、江戸時代初期までしか遡れず、前田本が相対的に最善本と考えられ、これ以上、本文研究の余地はないと考えられてきた。しかしながら、それはあくまでおよその見通しに過ぎず、本来諸本がどのような来歴を経て伝来したのか、巻・冊ごとに丹念な比較検討を経るべきであった。だが、いまだ四系統それぞれの性格や個別の伝本に関して追究したものはなく、前田本と他本との距離も測ることができず、効率的な本文校訂さえできない状態に陥っている。

また、『うつほ物語』は、内容上の矛盾や重複、各巻間の齟齬、表現の差異、ストーリーの非直線性など、種々の謎を孕む。しかし、そうした点こそ平安時代における物語の生成状況を反映すると捉えられる。生成当初、それぞれの巻は、独立した短編として存在しており、それらが後に取り合わされ、さらには改修されたり追補されたことで、長編化が果たされたのである。現在、矛盾とされるものには、こうした物語写本の生成の事情に起因するものがあるといえよう。しかし現状の作品論は、依然、最終的に存在する形にて物語を把握しようとする傾向が強い。

本論文は、具体的な作品論を展開する前に、まずは現存する写本を用いて、本文・成立の問題に可能な限り迫ろうとしたものであり、それにほぼ成功しているといえる。

本論文の達成は第一部に最もよく現れている。諸本の博捜、精密な書誌調査、本文の比較と系統分類、古態への遡源、そして後出本文の弁別といった文献学的手法は手堅いものであり、得られた結論も強い説得力に富む。とりわけ、第一章では、近年とくに盛んとなった、禁裏・公家の蔵書形成についての目録学的研究を援用し、歴史学の研究にも目を配り、目覚ましい成果を挙げている。

これまで、『うつほ物語』は、当初から全 20 巻で成立したと考えられてきた。しかし、『看聞日記』『実隆公記紙背文書』『慶長日件録』『禁裡御蔵書目録』『叢塵集』といった、禁裏・公家・門跡の蔵書の情報を伝える史料を博捜し、もともとこの物語は巻数が定まらず、室町時代後期に禁裏文庫に襲蔵され、書写される段階で、初めて現在見る 20 巻の構成が整えられ、そして巻の順が定められたという事実を明らかにする。このことで、現存諸本がこの禁裏本に発すること、かつ室町期以前は、異本らしい異本もなく、単一系統であったらしいことも推察される。第二章では、鎌倉時代の『うつほ物語』の姿を考えているが、この成果も、禁裏本以前の本文の様相が単一系統であったことを補強する。以上の指摘は、いわば『うつほ物語』本文研究の再出発を期するものとなろう。

さらに第三章では、古態をとどめるとされていた紀氏本の本文を遡源し、実は前田本と浜田本の複数回にわたる混淆の結果生成されたことを述べる。また第四章では、さらに物語の一部が独立して、別の物語として流布する現象を指摘した。これらは江戸時代における物語写本の流布と、派生の過程を具体的に明らかにしている。

これは、『うつほ物語』の江戸期写本の特殊な性格を突き止めたことでも貴重な成果であるが、それだけにとどまらず、物語写本の持つ、自由な享受の事例としても興味深いものであり、作品や時代を越えて参照される可能性を持つ。

そして第二部は、それぞれ新見に富む内容であるが、最も注目すべきは第四章であろう。物語研究は、内容分析に偏するあまり、写本という器で伝えられたことをともすれば忘れがちである。写本は一度流布されれば書き直すことができない。したがって、登場人物の設定を、後の巻で新たな設定に書き換えることは、むしろよく行われたと見てよい。ここでは『うつほ物語』『源氏物語』に見られる、これまでは単に矛盾とされる人物の事例をそれぞれ取り上げて、説得力のある見解を述べている。こうした意識は、成立当時の作り物語のありように寄りそって、初めて持ち得るものであろう。いささか手詰まりとなってしまった感のある物語研究に対して、原点に立ち戻って、大きな問題提起をした点は高く評価できる。

しかし一方で、この論文には、問題点がないわけではない。

まず、第一部において、平安時代の作り物語は巻ごとに成立し、享受されたとし、現存二十巻を一揃いとしてとらえる先行研究を批判するものの、髙橋君自身は、第二章において物語を「全体」として論ずる傾向が見られる。しかし、物語の校訂はもはや巻ごとに行うことが自然であり、底本や対校に使う本文も、必要に応じて、巻ごとに変更してもよいはずであろう。その点で通説からはまだ完全に自由ではない。たとえば「うつほ物語「集」」といった概念を用いることも有効であろう。

また想定される共通祖本がいかにそれぞれの系統を派生させ、変容していったか、といった点についてはいまだ事実の指摘にとどまり、具体的な考察はなされていない。髙橋君は、翻刻や注釈が無批判に前田本に偏していることに疑問を呈するが、前田本の遡源を専ら試みたことで、他の系統の本文への考察がややなおざりになってしまった感は否めない。前田本系統以外の本文も重視できるとするならば、他の系統が解釈に有用である事例をもっと豊富に示して欲しかった。資料編では既に校本を作成したのであるから、各伝本の特質を論じる土台は備わっているはずである。

前田本系統のうちでも、諸本ごとにもう少し詳しく見る必要があり、諸本の全体図を提示した上での、各伝本の本文の検討が不可欠である。天理図書館蔵「国籍類書」所収本、毘沙門堂門跡蔵本など、江戸初期の書写でありながら、これまで未調査の伝本がいくつかある。こうした写本の巻の構成はやはり禁裏本に極めて近いように思われ、それらの検討も不可欠である。

なお、本文批判に際して、「上位」・「優位」・「正文」といった語が、定義され

ずに使われているのもやや不用意であった。

本文研究の意義は、究極的には、本文の生成と伝来を明らかにし、それまで隠れていた作品の特質を明らかにするのに寄与する、という点にあろう。本論文で取り上げられたのは章段レヴェルでの新解釈にとどまり、それが具体的に物語のどのような読み直しに活かされていくのかは余り見えてこなかった。ある一つの巻において、たとえば浜田本を使ったことで本文解釈が変わっていく、といった具体的な事例を示して欲しかった。

本文批判と、作品解釈との有機的な関係は、第一部だけでなく、第二部においてもなお深められるべきであろう。『うつほ物語』にとどまらず、ある物語の研究史を振り返る時、等しく研究の始発期において、盛んに作品の成立が論じられる。しかし、どのように追究しようとも、成立論がいかにテクスト分析と関わってくるのかという点がはっきり見えて来なかったために、その後は、殆ど顧みられなくなってしまっていた。本論文は、そうした分断の現状を念頭に置き、作品の成立と本文の解釈とを何とか架橋しようと苦心した跡が随所に見出せる。

しかし、成立論が成功しなかった要因は、それを単純に作品の内容分析に結びつけようとしたことにあるのも、また自明である。内容分析の前にはまずテクストが存在する。ゆえに、さまざまな伝本のテクストを相対的にとらえ、物語を解釈する必要があろう。成立、諸本と本文、作品解釈、この三点をそれぞれ検討して総合的に考察する必要があったのではないか。本論文は、第一部に本文研究、第二部に成立論を据えた。しかし第二部は成立論とするよりも、第一部の成果を踏まえ、各伝本のテクストを幅広く俯瞰した上で、成立論を視野に収めつつ、作品解釈を論ずる形式とすれば、さらに本論文の全体の論旨によく沿うものであったように思われる。本論文では、二部に分けて、分断的に論じてしまった点が惜しまれる。

また第二部において最も疑問があるのは、第一章であろう。『うつほ物語』の主人公が仲忠と考えられる理由を、他の物語作品の主人公と比較検討しながら考察しているが、それらが実は先行する『うつほ物語』を参照し踏襲しているとすれば、方法論としていささか問題がある。また『狭衣物語』『夜の寝覚』など平安時代後期の作品は余りに時代を隔てており、逆に『うつほ物語』の特質を見えにくくしてしまう。『うつほ物語』のように、短編を徐々に増補・加筆・修正し、現存する長編の形へ変貌を遂げたと考えられる物語と、これら平安時代後期の作品のごとく、ある程度構想が定まって書かれている物語とでは、主人公の造型の方法も大きく変わって当然であろう。また第二章の問題も、ストーリーが並立的に存在すると柔軟に考えて良かったように思われる。

とはいえ、以上は望蜀の言であり、この論文によって得られた成果は揺るぎない。現在の物語研究は、例えば『源氏物語』のように、先人によって安定したテクストが提供された作品に偏してしまった。細分化がとめどもなく進行し、かつ研究者間で共

有する問題意識までもが均質化してしまい、かえって根源的な問題が看過されるという弊害を生み、閉塞的状況に陥っている。髙橋君の研究はこうした状況に抗して、『うつほ物語』を対象とし、これまで先人が避けて通ってきた、成立・伝本・本文の問題を取り扱い、10 年近い研鑽のすえ、明確な道筋を立てたものである。労作というべき『うつほ物語』全巻の校本の作成も含めて、平安時代の物語研究に寄与する功績は非常に大きい。

以上の点から、審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位授与に十分ふさわしいと判断するものである。